

特集：平成26年度 山と自然のサイエンスカフェ@信州から

## 第5回 「カモシカとシカの暮らし」 (10月16日)

カモシカとシカの暮らし方のちがい、そしてシカが近年急増している原因について話題提供しました。

カモシカは、30年以上前にスギやヒノキの苗木を食害することで大きな社会問題になりましたが、最近は植林面積の減少で被害が大幅に少なくなっています。一方、ニホンジカ（以下、シカ）が激増し、農林業被害だけでなく、自然林の樹皮を食べて枯死させたり、高山植生への影響まで懸念されるようになりました。その対策を考えるためには、まずそれぞれの生態を知る必要があります。

## カモシカとシカの生態のちがい

カモシカは基本的に単独生活で、オス同士あるいはメス同士でなわばりを持ち、オスとメスがなわばりを重ねて一夫一妻を形成しています。なわばりは直径1km前後くらいで、何年も維持されます。このため、カモシカは自分たちで生息密度を非常に低く安定させる動物です。一方、シカは群れ生活で、もともと増える性質をもつ動物です。増え始めると餌を食い尽くし、そこの植生を変えてしまうほどです。季節移動し20kmくらい移動する個体もいるそうです。秋の発情期に特定のオスが短期間なわばりを持ち、メスの群れを取り込み一夫多妻を形成します。



カモシカ (秋田市仁別)

## シカはなぜこんなに増える？

江戸時代はシカの数が多く多雪地まで分布していたようですが、明治になると銃器の性能が向上し、輸出や軍部の利用で毛皮の需要が急増したために、乱獲で数が激減しました。上村・南信濃村（現飯田市）と大鹿村では、大正12年（1923年）にシカの捕獲禁止区域が設定されたほどです。ところが、明治末にオオカミが絶滅し、戦後は肉や毛皮の需要もなくなり、シカの大敵がいなくなりました。さらに、1970年前後くらいの広範囲の皆伐、里山の放置、牧草地の拡大、地球温暖化などの要因も重なり、おそらく江戸時代以上に数が増えていると考えられます。このため、長野県は平成13年に「特定鳥獣保護管理計画（ニホンジカ）」を策定し、捕獲目標値を5年ごとに設定して個体数を抑えるよう試みられています。

参加者のみなさんもシカの問題には非常に関心が高く、多くの質問があり議論も活発に行われました。オオカミ導入をどう考えるかとのご質問については、オオカミがいる生態系を社会が許容できるかどうかの問題であることをお答えしました。（岸元良輔）

北アルプス稜線に出没したニホンジカ  
(環境保全研究所撮影)第5回の様子  
(カフェ・マゼコゼにて)